

## 平成 1 2 年度試験研究成果

区分	指導	題名	ぶどう「安芸クイーン」の栽培法 - 適正樹相と着果量 -			
<p>〔要約〕ぶどう「安芸クイーン」の適正着果量は1葉当たり1粒程度である。適正樹勢は開花始期の新梢長が30～50cm程度である。若木などで強樹勢となり花振るいが多くなることが予想される場合は、ジベレリン処理による無核果化により着粒数を増加させることができるが、果軸の硬化等問題点もあるので使用にあたっては十分留意する。</p>						
キーワード	ぶどう	安芸クイーン	栽培法			園芸畑作部 果樹研究室

### 1. 背景とねらい

ぶどう「安芸クイーン」は良食味で外観、品質等良好であることから本県の奨励品種としてしているところであるが、本県ぶどうの大粒主要品種である「紅伊豆」に比べ花振るいが多いなど栽培面での課題もある。また、新しい品種であることから、その栽培法に関して不明の点もあるため検討が必要であった。このため、今回着果量と安定生産にかかる検討を行った結果知見が得られたので紹介する。

### 2. 技術の内容

- (1) 「安芸クイーン」の適正着果量は1葉当たり1粒程度である。1葉当たり1.25粒程度とすると、着色不良果の割合が高くなり、糖度も低くなる(表1)。
- (2) 「安芸クイーン」では開花始期新梢長が短いほど1房当たりの着粒数が多くなる傾向であり(図1)、結実安定の点から開花始期の新梢長が30～50cm程度の樹勢となることが望ましい。75cm以上となる樹勢では花振るいが強くなり、安定収量や良房が得られない。50cm以下では新梢の登熟率がやや低くなるが70%程度であるため次年度の種枝確保に問題はない(表4)。
- (3) 若木などで極端に樹勢が強くなり花振るいが多くなることが予想される場合は、ジベレリン処理により無核果化することで着粒数を増加させることができる。処理方法は、満開期と満開後10日の2回とし、1回目は12.5ppm 2回目は25ppmで花(果)房浸漬する(表5、6)。

### 3. 指導上の留意事項

- (1) 本試験では、着果量の多い1葉当たり1.25粒でも新梢登熟率は次年度の種枝確保には影響はない程度であったが(表2)、過着果は凍寒害を助長することにもつながる。
- (2) 適正な樹勢にするため、剪定量の加減や、芽かきの時期の調節などを行うとともに、樹勢が強くなると予想される場合は、フラスター液剤を散布し、花振るいを軽減する。
- (3) 過少な着果は強樹勢化を助長するため、花振るいが多く着果量が少なくなる場合は、樹勢コントロールため商品性の少ない果実も着果させる。
- (4) 「安芸クイーン」はジベレリン処理により、果軸が硬化し、バラ房となることがあるので、販売方法等を十分検討した上で実施するか否かを決定する必要がある。
- (5) 「安芸クイーン」の仕立て法、目標収量等その他の栽培法については平成10年度研究成果を参照のこと。

### 4. 技術の適応地帯

県中～南 安芸クイーンの栽培適地。

### 5. 当該事項に係る試験研究課題

〔果樹1〕-1-(3)-ア-(ア)ぶどう新品種導入による高品質、生産安定、省力栽培法の確立実証  
-c 高品質安定生産実証試験

### 6. 参考文献・資料

平成9～11年度 果樹試験成績書(一部未定稿)  
平成12年 東北地域重要新技術研究成果 No.29「寒冷地における担い手に魅力ある高品質ぶどうの大規模栽培技術体系の確立」

7. 試験成績の概要

表1 「安芸クイーン」の着果量と果実品質 (H.9~12年の4ヶ年平均)

着果量 <sup>1)</sup>	1粒重 (g)	糖度 (Brix %)	酸度 (g/100ml)	含核数 (個)	着色程度別房数割合(%)			
					4 (濃い)	3	2	1 (薄い)
0.75粒/1葉	13.2	19.1	0.37	1.3	22.5	41.6	30.2	5.7
1.00粒/1葉	13.8	18.6	0.37	1.5	12.5	54.6	26.7	6.3
1.25粒/1葉	12.8	17.9	0.41	1.5	3.3	27.7	38.1	30.6

1)各年次とも調査果実は10果房2反復調査。各年次とも着果量は8月上旬に調整した。

表2 「安芸クイーン」の着果量と新梢登熟率(H.10,11平均)

着果量	最終新梢長(cm)	新梢登熟率(%)
0.75粒/1葉	121.8	68.7
1.00粒/1葉	128.8	74.6
1.25粒/1葉	89.5	63.8

1)各区20新梢調査。

表3 「安芸クイーン」の開花始期新梢勢力別果実品質 (H.9~12平均)

開花始期新梢長	平均房重	1粒重	糖度	酸度	含核数
	(g)	(g)	(Brix %)	(g/100ml)	(個)
76cm以上	290	13.0	18.6	0.37	1.2
51~75cm	341	12.9	18.5	0.36	1.4
30~50cm	362	12.9	18.3	0.38	1.4

1)各区約20房調査。

表4 「安芸クイーン」の開花始期新梢長別最終新梢長と新梢登熟率(H.10,11平均)

開花始期新梢長	最終新梢長	新梢登熟率
	(cm)	(%)
76cm以上	299	91.5
51~75cm	190	88.2
30~50cm	84	68.3

1)各区20新梢調査。

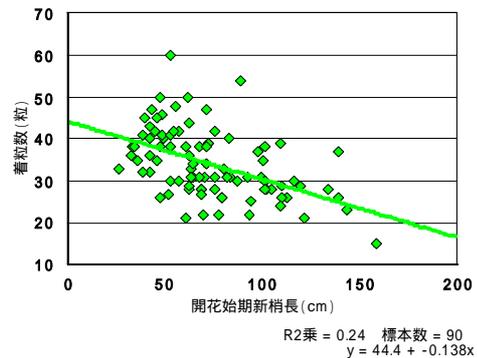


図1 開花始期新梢長と着粒数の関係

表5 「安芸クイーン」に対するジベレリン水溶剤の無核果及び着粒数増加効果 (H.9,10平均)

処理方法		開花始期	調査房数	着粒数	無核果数	無核果率
1回目 (満開期)	2回目 (満開10日後)	新梢長(cm)	(房)	(粒)	(粒)	(%)
GA12.5ppm	GA25ppm	72.1	10	19.3	18.3	97.6
無処理		71.1	10	10.1	1.8	18.3

表6 ジベレリン水溶剤の処理が「安芸クイーン」の果実品質に及ぼす影響 (H.9,10平均)

処理方法		房重	1粒重 <sup>1)</sup>	糖度	酸度	果軸硬化 <sup>2)</sup>
1回目 (満開期)	2回目 (満開10日後)	(g)	(g)	(Brix %)	(g/100ml)	(指数)
GA12.5ppm	GA25ppm	225	12.0	20.1	0.57	2.8
無処理		131	13.1	19.0	0.65	1.0

1)処理区は無核果粒重、無処理区は有核果粒重。

2)果軸硬化：1(普通)、3(硬い)、5(強く屈曲)